

視察・研修報告書

研修先	第19回全国市議会議長会研究フォーラム in 盛岡
日時	2024年10月9日～11日
場所	トーサイクラシックホール岩手
テーマ	主権者教育の新たな展開
(講師)	各報告にて記載
概要	
I 10月9日午後 パネルディスカッション「地方議会の課題と主権者教育」	
コーディネーター	井柳美紀さん(静岡大学人文社会科学部法学科教授)
パネリスト	土山希美枝さん(法政大学法学部教授)
	越智大貴さん(一般社団法人 WONDER EDUCATION 代表理事)
	渡辺嘉久さん(読売新聞東京本社ネットワーク事務局)
	遠藤政幸さん(盛岡市議会議長)
画像(略)	
1 井柳美紀さん 「主権者教育の新たな展開」	
学校で「政治教育」を行う法的根拠は、教育基本法第8条に規定。	
法律的にも学校での政治教育は「尊重しなければならない」ことになっているが、同時に「法律に定める学校は、特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教育その他政治活動をしてはならない」(教育基本法第8条第2項)とも規定されており、政治教育には「政治的中立性」が求められている。	
「政治教育」の尊重と中立性はともに重要だが、「中立性」が強調されるあまり、学校現場では「政治教育」は敬遠されてきた。	
しかし、「投票率の低下」「無投票当選の増加」「議員の性別や年齢構成の偏り」等の課題が各地で噴出し、民主主義社会を維持・発展させるために、次世代を担う主権者を育てていくための「主権者教育」がすすめられるようになった。	
2 土山希美枝さん 「誰がための主権者教育か」	

議会による主権者教育には意味がない。

「自治体の、地域のために熱い思いを持って動き、それを生業にする存在」との初めての対話は、確かに生徒を刺激する。

議員にとっても、自分を尊重してくれ、耳を傾けてくれ、関心を持ってくれる若者と出会い語ることは嬉しい機会であろう。

だからと言って、中学生議会、高校生議会を「主権者教育」と議会が称するのは、教育を軽く見てはいないか？

教育という営みは「どの能力を伸ばすために」、「どのようなプログラムを」、「授業時間数という制約をふまえつつ設計し」、「教える技術を持つ教師が担当」しても、能力を取得させることは簡単ではない。

ましてや、よくできる生徒を派遣してもらって、先生に手を入れてもらった作文を朗読してもらい、拍手して「大人」の立場からのコメントで締めるような議会にとどまるのであれば、それでどうして「教え育てた」と言えるだろうか。

ただし、学校側が、議会という「場」を使って、教育の一環として、また効果を高める機会として活用することは有益と言える。

画像(略)

3 越智 大貴さん「若者の政治・社会への意識から考える主権者教育の必要性」

「18歳意識調査(2024 日本財団)」から

- ・政治に関心が特別低いわけではない
- ・自分で国や社会を変えられると思っていない
- ・社会のために役立ちたいとそこそこ思っている

ということがわかった。

議会の役割としては、交流の機会を増やし、「自分の意見が聞いてもらえる」と思えたり、「自分のアイデアが反映されるかも」と感じられる機会を増やすことだ。

13年間、主権者教育にとりくんできたが「政治家との交流は、子どもの政治意識の醸成に大きく影響する」と感じている。

だからこそ1回でも議員との交流会を作りたい。

4 渡辺 嘉久さん「高校生の政治意識」

「50年後、人口減少の日本で、学校の授業料を上げるべきか」を考えさせる実践。

その際、「未来を決めるのに必要な情報を持っているか」「その情報は正しいか」が重要になる。

「政治は変えられる」と感じている子どもの方が「投票に行く」傾向が高い。

5 遠藤 政幸さん「盛岡市議会のとりのくみ」

- ・高校生議会
- ・おでかけミーティング(市議会が大学に「おでかけ」し学生と意見交換)

II 10月10日午前 課題討議「主権者教育の取り組み報告」

1 地方議会と主権者教育

河村和徳(東北大学大学院情報科学研究科 准教授)

- ・理想は、主権者教育は、シチズンシップ教育であるべき
- ・現実には、知識の享受(制度理解)中心、投票者重視、連携の不十分
- ・18才選挙権、選挙と選挙後の連続性を理解させる必要「地方自治は民主主義の学校」

画像(略)

2 高校生の議会傍聴と意見交換会の取り組み 白鳥敏明氏 長野県伊那市議会前議長

- ・伊那市 人口 64,976 人、H30 年市議会選挙(定数 21)が無投票に
- ・魅力ある議会づくり検討会設置
- ・令和元年 6 月 伊那西高校生の議会傍聴、7 月意見交換会
- ・令和 4 年度からは市内全高校へ議会傍聴、意見交換会
- ・成果:高校生からの意見・提案、請願「子育て環境改善」など

3 主権者教育の取り組みについて 諸岡覚氏 四日市市議会議員(第 83 代議長)

- ・四日市市 人口 306634 人、定数 34 人 正副議長立候補者による所信表明(公約)
- ・R4年 11 月~「ワイ!ワイ! GIKAI」 常任委員会が高校・大学に出向いて意見交換会
- ・高校生議会(R6 年 1 月) 立候補体験 高校生議長から意見書提出

4 シチズンシップ教室の取り組み 服部加代 熊本県山鹿市議会議長

- ・山鹿市 人口 4 万 8 千人 高齢化率 39%
- ・課題:開かれた議会になっていない、住民の理解と関心が得られていない、なりて不足
- ・小学生対象に教室開催:「ポリポリ村のみんしゅしゅぎ」読み聞かせ、模擬投票など
- ・感想:実際に投票してみて、選んだ人によってどんな未来になるかわかることを知る

Ⅲ 視察 10月10日午後～11日午前午後

1 宮古市(津波遺構 たろう観光ホテル跡)

海のすぐそばにあったホテル。2階まで津波がきて壁が抜けたおかげで柱などが残った。杭をしっかりと打っていたので基礎も崩れなかった。今は震災遺構となっている。

画像(略)

6階の客室だった部屋で震災時のビデオを観た後、自身も被災した担当の方から震災時の話や災害時の備えについて話を聞いた。津波がすごいスピードで襲ってくることや、生と死が紙一重だったことが分かる。

つなみてんでんこ。自分の身は自分で守る。家族を助けに戻ったりしない。率先避難者になれる。地震の後には津波が来る。津波のスピードは速いので追いつかれる。遠くではなく、高い所に逃げるのが重要。



2 大槌町(三陸花ホテルはまぎく)

支配人から話を聞いた。海辺のホテルが地震と津波で壊滅状態になった。近くの民家が駐車場まで流されてきた。ホテルのチェックイン前で丁度従業員が一番多い時間帯で客を避難させることができたが、両親である社長やおかみなど4名が犠牲になった。

行方不明者を探したい一心だけで、ホテルを復興しようという気は無かったが、5月からボランティアがポツポツ来てくれ延べ500人が来てくれた。がれきを片づけてくれ、頑張ってくださいと声をかけられ、半年1年とたち決断の時がきて、2年半から3年でホテルの名前を変えてゼロベースからスタートした。町にはこのホテル1軒しかなく町民の集まりの場所だったことも再開につながった。

大槌町は人口1万5000人のうち1300人が亡くなった。役場が被災し、災害対策本部の町長以下40名が犠牲になり、とても混乱し大変だった。

3 震災学習列車(三陸鉄道リアス線 大船渡市盛駅～釜石市釜石駅)

列車内で、リアス式の山で区切られた集落ごとにそれぞれ異なる状況であったことなどの話を聞いた。現在は線路や駅をかさ上げしている箇所などの説明を受けた。

長いトンネルの中で地震にあい列車が停車。停電して真っ暗で外の情報も全く入らなかった。前が9m、後ろが30mだったが、シミュレート訓練を重ねていて、前に進むのではなく後ろに逃れたため助かった。

鉄道の再開にクウェート、台湾、アメリカ、カタール、中国などが支援してくれた。

4 釜石市(鵜住居復興スタジアム)

復興のシンボルとしてラグビーワールドカップの開催地に立候補し選ばれた後にスタジアムを整備した。小中学生約600人が一緒に逃げて助かった鵜住居小学校、釜石東中学校の跡地に建てられている。学校は現在高台に移転されている。

5 釜石市(釜石祈りのパーク)

鵜住居地区防災センターの跡地にある施設。防災センターにいた196名の内162名が犠牲となり、その方々の芳名を刻んでいる慰霊碑。

11メートルの津波が襲った。防災センターでたくさんの方が亡くなった理由の一つは名称で安全そうだと人が思ったこと。名称は防災センターだが、コミュニティーセンターや集会の役割を果たし、市の出張所もあった。集会ホールに集まって多くの方が亡くなった。2階の屋根に上る梯子を外していた。以前は高台の神社や寺を避難場所として避難訓練をしていたが、参加者が少なく、防災センターで訓練をするようにしたところ100名を超えるなど参加者は増えたが、この訓練があだになった。

- ・避難訓練は、回数や参加者増だけではダメ。訓練すればいいというものではない。
- ・安全な場所はどこか。人が集まっている所＝安全、ではない。
- ・仮の生活の場所となる「避難所」と命を守る場所「避難場所」は異なる。
- ・正しい知識をもつ
- ・油断が大きな被害につながる。
- ・大槌町では市長以下40名が亡くなった→役場は安全な所に建てる。

釜石市防災市民憲章 命を守る

備える 災害はときと場所を選ばない

避難訓練が命を守る

逃げる 何度でもひとりでも安全な場所にいち早く



その勇気はほかの命も救う

戻らない 一度逃げたら戻らない戻らせない

その決断が命をつなぐ

語り継ぐ 子どもたちに自然と共に在るすべての人に

災害から学んだ生き抜く知恵を語り継ぐ

6 釜石市(宝来館)

宿の2階くらいの高さまで津波が襲った。客を裏山に逃がしたが、おかみは津波にのまれ、何かにしがみついて助かった。震災の語り部としての活動をしている名物女将。

7 遠野市(遠野広報支援資料館)

岩手県の内陸と沿岸の中間地点に位置し、道路網が整備され、交通の要衝であった。



平成 19 年 11 月 19 日、三陸地域地震災害後方支援拠点施設整備推進協議会を設立

参画市町村(当時)

宮古市 釜石市 大船渡市 陸前高田氏 山田町 大槌町 住田町 河井村 遠野市

津波が来ない内陸が担うべき役割、内陸と沿岸の結節点である遠野が担うべき役割を、国や県の関係機関約 80 カ所に対し、要望・提案活動を行った。

平成 23 年 3 月 11 日、午後 2 時 46 分地震発生。

市役所の本庁舎中央館は全壊。市内全域甚大な被害を受け、避難者は約 2 千人。

地震発生から 14 分後に遠野運動公園の開放を指示し、自衛隊、警察、消防などの救援部隊受け入れの準備を開始。庁舎前の駐車場にテントによる災害対策本部を設営、3 時 28 分に避難勧告を発令。市民の安全確保と安否確認の活動を開始。救援部隊を滞りなく受け入れるなど、訓練の経験が生かされた。

垂直関係とタテ割りには課題がある。国・県の情報が被災市町村に伝わらず、情報がなくて不安感が増す。

事態間のヨコの連携「水平連携」が機能した。

⇒ヨコの連携を支える責任・権限・財源を踏まえた新しい仕組みの構築が必要である。

所 感

井柳さんの言うこともわからないではないが、「投票率や選挙競争率の低下という現象を打開するために主権者教育が重要」というのは、本末転倒な気がしてならない。

・戦後、民主主義教育に展望を持った時代(1947)、

・学生や民衆の社会運動の影響を教育から排除しようとした時代(1969)、

を経た結果

「社会の問題に関与したい」

「うまくいかかわからないことにも意欲的にとりくむ」

「社会現象を変えられるかもしれない」

と思う若者が極端に減ってしまったことが、越智さんからも提起されていたし、2018年の内閣府調査「今を生きる若者の意識～国際比較から」でも明らかになっている。

そのため学校でのとりくみに加えて、教育委員会や選挙管理委員会、市議会が「主権者教育」にとりくみはじめたわけだが、それらのとりくみは根本の若者の現状を抜本的に変革させる手立てとは言い難い。

土山さんの「誰がための主権者教育か」という提起は、普段、私が感じていた「議会による主権者教育」への違和感を見事に表現してくれた。

教育のプロではない議員が、その熱意で「主権者教育」にとりくんでいることは素晴らしい。

しかし、そのとりくみの多くが一部の中高生、しかも生徒会レベルの学力や意欲等の高い子たちへの働きかけに終始しており、意欲・能力・学力の高い子たちからの感想文を読み、議会側は満足してしまっている。

当然、若者全体の現状を変革しうるとりくみとは言えない。

他のパネラーからは「模擬投票」のような疑似体験や、中学生や高校生を招いての「意見交換会」などの「手法」や「方法論」についての報告があったが、前述したとおり、これは若者全体の現状を変革しうるとりくみではない。

そこで「根本の若者の現状を抜本的に変革した実践例」について質問をした。

パネラーからは

「山形県遊佐町…政策を実体化する権限と財源をもった実践的教育」

「愛媛県丹原高校の校則見直しのとりくみ」

を紹介してもらった。

これらの実践を今後研究し、大野城市の若者の主権者たる意欲、民主主義を守ろうとする意欲を高めていきたい。

—作成者 かわのとしお—

主権者教育と若い人たちの意見、主張を市政に反映させる重要性、および市議会の民主主義を考える研修となった。

また、本市議会が継続的に行っている中学生議会や、本年度実施の筑紫中央高校との意見交換会は、開かれた議会・議会報告会の位置づけであるが、改めて先進的な主権者教育ともいえると考えた。更に、こども・小中高大生の参加と交流、意見交換、意見反映が進むように考えていきたい。

今回の研修にて、「宮古市・大槌町・釜石市・遠野市 東日本大震災からの復興」についての視察は、特に大きな学びとなった。津波遺構たろう観光ホテル、三陸花ホテルはまぎく、震災学習列車、釜石鶴住居復興スタジアム、釜石祈りのパーク、3.11 東日本大震災遠野市後方支援資料館、宝来館のそれぞれで、つなみ・災害を生き抜いた方々のお話を聞き、実物を体験することができた。

昨年有志で行った福島原発被災地訪問を改めて思い起こし、原発被災は、津波が襲わなかった広大な人と地域も含めて、故郷を追われ戻れない、甲状腺がん等の健康被害に苦しみがある。原発がないこと、そして、いつくるかわからない災害に対して、備品や避難所等の対策と日頃からの避難訓練などの大切さを改めて感じた。今回の研修を、大野城市政と今後の活動に活かしていきたい。

—作成者 松崎百合子—

釜石市の防災センターでたくさんの方が亡くなった理由の一つは名称で安全そうだと人が思ったという話を聞き、安易に「防災センター」という名称を使うことの危険について考えさせられた。正しい知識、科学的な知見に基づく防災対策、災害対応が必要であることを教えられた。防災訓練もただ多くの方が参加することが重要なのではなく、正しい知識に基づく実践的で有効な訓練を行わなければならないと思った。

遠野市が当市の置かれた地理的歴史的背景から沿岸被災地の後方支援の役割を果たすべく準備をしてその役割を果たしたことは、素晴らしいことだと思った。

大槻町では町長以下 40 名が犠牲になり、役所は安全な場所に建てる必要があると釜石市でもその話を聞かされた。

以上から、漠然と災害に備えるというのではなく、地震なのか豪雨なのか規模はどのくらいか、具体的想定が必要である。そして、その想定される災害に対する有効な備えと実践的な訓練が必要だと教えられた。また、「水平連携」の話にあるように、災害は一つの自治体に収まらない。本市の果たすべき役割は何かも検討する必要がある。

—作成者 永利恭子—

